日本語大好き

にほんごだいす

日本語力が証明された人たち

日本語力測定試験
高得点者紹介シリーズ 第1集

日本語学研究所編

特別インタビュー
作家・下重暁子氏が話す
「日本語と私」

発 行:日本語学研究所
発 売:明治書院

日本語力測定試験
高得点者紹介シリーズ 第1集

日本語大好き

（にほんごだいす）

日本語力が証明された人たち

日本語学研究所編

発 行:日本語学研究所
発 売:明治書院

■編集
日本語学研究所

■編集協力
水谷とうじ・岡田睦子・高田靖子・
田中康隆・二見勉・安本竹安

日本語力測定試験高得点者紹介シリーズ　第1集
日本語大好き（にほんごだいす）　日本語力が証明された人たち

平成12年4月1日　初版発行

発行者　日本語学研究所
代表者　三樹　譲
印刷者　図書印刷株式会社
代表者　伊藤　勝

発行所　日本語学研究所
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町1-16
TEL 03(3292)0131　FAX 03(3292)0132

発売所　株式会社　明治書院
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町1-16
TEL 03(3292)3741　FAX 03(3292)4429

©NIHONGOGAKUKENKYUSHO　2000　Printed in Japan
ISBN 4-625-63307-9
本文レイアウト　株式会社　百足舎
カバーデザイン　松田斉（WITH RS）

はじめに

日本語力測定試験も既に四回、回を重ねるごとに総得点最上位の方々について知りたいという声が多くの受験者から聞かれるようになってきた。「どのようにして日本語力をつけたのだろうか。」「日常生活の中でどのように日本語力を生かしているのだろうか。」こんな素朴な理由から、現在までの「師範級」獲得者の中から十六人にインタビューを試みた。十六人のインタビューから感じられることは、皆、「日本語が大好き。」であること、毎日の自分の表現手段として日本語を生き生きと捉えていることである。

更に、特別インタビューとして、作家の下重暁子氏に「言葉の持つ意味」についてお話を伺っている。

（注…「師範級」の名称は第四回日本語力測定試験まで。第五回目以降は、総得点最上位を「日本語力特一級」に変更。）

「日本語大好き」●目次

はじめに

第一部　作家・下重暁子氏が話す

「日本語と私」―言葉の持つ意味― …… 6

第二部　十六人の日本語大好きな人たちに聞く！

斉藤洋子さん（東京都） …… 22
岡嶋京子さん（京都府） …… 32
児玉美奈子さん（静岡県） …… 44
内野博子さん（神奈川県） …… 58
鳥原加苗さん（東京都） …… 68
越尾寿美子さん（東京都） …… 80
鎌田文子さん（神奈川県） …… 92
曽根祥子さん（京都府） …… 104

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

須田信正さん（東京都）……120
多賀宮子さん（東京都）……128
瀧慶治さん（茨城県）……138
田中宏幸さん（兵庫県）……148
坪内清さん（千葉県）……162
寺尾祐一さん（静岡県）……172
原元奈津子さん（東京都）……184
福岡一美さん（富山県）……194

コラム

ちょっとひと休み・その1……20
ちょっとひと休み・その2……31
ちょっとひと休み・その3……43
ちょっとひと休み・その4……67
ちょっとひと休み・その5……79

ちょっとひと休み・その6……119
ちょっとひと休み・その7……147
ちょっとひと休み・その8……161
ちょっとひと休み・その9……193
日本語力現状レポート・その1……56
日本語力現状レポート・その2……90
日本語力現状レポート・その3……103
日本語力現状レポート・その4……127
日本語力現状レポート・その5……170
おわりに……204
日本語力測定試験はあなたの日本語力を証明します……205

第一部

作家・下重暁子氏が話す

「日本語と私」

―言葉の持つ意味―

自分の考えや感情を表現することが〝言葉〟の持つ意味。

言葉には毎日のその人の生き方や暮らし方が反映される。
自分の内面を磨けば、言葉も自然と磨かれる。

作家・下重暁子さん

しもじゅう・あきこ●昭和二十四（一九四九）年、早稲田大学教育学部国語国文科卒。同年NHKに入局。女性トップ・アナウンサーとして活躍し、昭和四十三（一九六八）年退社。民放キャスターを経て文筆活動に入る。エッセイ・評論・ノンフィクションなど幅広いジャンルで活躍。著書に、『純愛―エセルと陸奥廣吉』（ノンフィクション・講談社）、『鋼の女』（ノンフィクション・講談社）、『思へばこの世は仮の宿』（ノンフィクション・講談社）、『女が30代にやっておきたいこと』（大和出版）など、五十数冊以上ある。日本ペンクラブ常務理事・日本旅行作家協会副会長、日本文芸家協会・日本エッセイストクラブ会員。

NHKのトップ・アナウンサーとして活躍後、エッセイや評論・ノンフィクション・小説などの執筆活動に入った下重暁子さん。アナウンサーと文筆活動、一見対極にも見えるが、両方とも日本語を駆使する。「きっと敬語や文法的にも完璧な日本語を話す、日本語の達人にふさわしい。ぜひぜひ、日本語の身につけ方を伺いたい。」と切り出してみる。すると、「私は、完璧な日本語なんて話しませんし、話せませんよ。敬語などの言葉遣いは、日常生活の中で覚えていけばいいんです。私は、自己表現のために〝言葉〟はあると思っています。」ときっぱり。

「自己表現のための言葉。」下重さんの人生には常に「自己表現をいかにするか。」が

テーマにある。どうやら、ここに、日本語を好きになり、日本語を巧みに話すことができるようになるヒントがありそうだ。

小学校二年生と三年生の二年間で読んだ本が思考力の基礎

言葉は、特別なものではありません。日常のものです。毎日のその人の生き方や暮らし方が反映されます。最近は、「敬語も話せない」と嘆く大人が多いですが、敬語はある程度親の責任ですよ。昔は親や地域社会がしつけをしたんです。今は学校で教えてもらおうと思っていますね。

話し言葉に関しては、家庭の責任が特に大きいと思います。無意識のうちに、親とそっくりになりますから。母は、新潟(にいがた)出身で、越後弁(えちご)がなかなか抜けない人でした。私は新潟で育ったことはないし、本人同士は全く似ているとは思っていなかったのですが、友達が電話をかけてきて、間違って母と話すことがよくありました。

親子や兄弟は知らないうちに似てくるものです。五歳から中学生といった時期までに人間の話し方の基礎は決まるといいます。その時期までに一緒にいる両親を含めた環境の影響が大きいですね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私の言葉を含め、私という人間に影響を与えたのは、父の本だと思います。父は、軍人でした。「絵描きになりたい。」という夢を諦めて、軍人になったのですが、ひまさえあれば絵を描き、中国に出征していたときも、スケッチを描いては、送ってきました。そういう人ですから、画集があふれた書斎はアトリエ兼用。本棚には、歴史書や小説、詩集などの本がたくさんありました。

小学校の頃、知人を頼って奈良県の信貴山に疎開しましたが、土地の学校になじめませんでした。向こうも抵抗あったと思います。登校初日、大工さんの作った白木の机を持っていったら、いじめの対象。蛇を持って追いかけられたり。おまけに体も弱くて、肺門淋巴腺炎になりましてね。結核の初期段階で、毎日、微熱があって、下がらない。いい薬もない時代で、「家で栄養とって寝てなさい。」と医者から言われて、小学校二年生と三年生の二年間、家で過ごしました。

一日に一度、軍医さんが診察に来る以外は、することないんですよ。そこで、父の本を読むようになったんです。私が言葉に親しみを持ったのは、それがきっかけでしょうね。片っ端から読みましたね。あ、読んでいたんじゃない。見ていただけ（笑）。だって、『人間失格』の太宰治など、「だざいじ」なんて読んでいたぐらい。ほかにも芥川龍之介の

童話や夏目漱石、石川啄木など、小学校低学年だから、何書いてあるのか、分からないけど、めくっていました。

あの頃の本は難しいけど、仮名が振ってあって、意味は分からなくても読めました。難しい本ばかりではありません。宮沢賢治の童話や少年少女文学全集などもあり、私の想像の翼を広げてくれました。

父の本棚には、いろいろな小説や詩集がぎっしり詰まっていて、飽きることがありませんでしたね。

その二年間で自然に力がついたんでしょう。学校に戻ってからは、特に勉強しなくても、国語だけは誰にも負けませんでした。基礎はあの二年間にあります。

中学生ぐらいからは、手当たり次第本を読むようになりました。吉川英治の十四巻ある『三国志』やトーマス・マンの『魔の山』など。『三国志』を読んだときは、達成感がありましたね。でも、あまり覚えてないから、理解したわけではないでしょう。とにかく読んだことは読みました（笑）。それから当時流行りの少女小説なども。

やはり、絵や本が好きな父と、短歌が好きな母の影響が大きいでしょうね。

「活字に触れることに子供の頃から慣れていることが、人生を豊かにする。」と話す下重さん。病気で休んでいた二年間は、下重さんの思考力や想像力、そして創造力を豊かにした。しかし、一方で、友人と遊んだりすることもなかった二年間は、「どう人と接していいか分からなくなった。」ほど、人とのかかわり合いが不得手となる。中学・高校はごまかしながら過ごすが、「ずっと疎外感が拭えない」という気持ちは、大学時代に特にひどくなったという。「自意識が過剰で、自意識を持て余して生きていた。」と当時を振り返る。「うつうつとした気持ち」は、ひそかに詩や文章を書くことで、整理していた。

大学時代はほとんどしゃべらなかったという下重さん。しゃべる仕事に就こうなどとは、夢にも思わなかったという。

自分が見たことや聞いたことを自分の感覚で言うことが大切

アナウンサーになったのは就職難の産物。大学生の女性を公募していたのはアナウンサーぐらいしかなかったから。自分で食べていこうと思っていたので、教職と図書館司書の資格も取りました。当時は先生の職も女性の募集はなかったですね。私は書く仕事をした

かったので、新聞社か出版社と思っていたのですが、やはりない。

昭和三十四年、ちょうど皇太子（今の天皇）御成婚の年で、それをきっかけにお茶の間にテレビが普及して、民放も含めてアナウンサーの公募があったんです。

私、しゃべるの嫌いだし、人前に出るのが嫌なのに、ほかに選択肢がないから受けました。女性はほとんど受けていました。当然、倍率が上がりますね。ＮＨＫは、女性は四人だけしか採用しなかったのですが、合格してしまって、友達も不思議がってました。

でも、私、理由が一つだけ分かっています。ふだんは話さないけど、人前で朗読や独唱など舞台に上がると、開き直って違う人になれる。それで、度胸がいいと思われたのでしょう。

アナウンサーをずっとやろうとは思いませんでしたね。入社して四、五年たってから、「これは私がずっと目指している自己表現の手段ではないな。」と考え始めたんです。たくさんの人が私のことを知ってくださるけど、それは広く浅くです。そこに私はあまり価値を見いださないんですよ。少なくとも深くのほうが私には大切です。生きるというのは自己表現です。常に自分を見つめ、立ち止まり、何を自己表現の手段にするのが、一番自分に向いているのか、探すことかもしれませんね。私は、ものを書いて自己表現したいと思

っていました。

もちろんアナウンサーになってよかったと思うこともあります。入社して最初の頃は、新人なので、「今夜の番組から」という番組を紹介する番組の担当になりました。ＮＨＫの番組はあまり変わらないのでマンネリになり、単調でおもしろくなくて、嫌で仕方なかった。自分が楽しんでいなければ、嫌な顔になりますね。

はたと気が付いたんです。見ている人のためや聞いている人のためではない、自分のためになんとかしなければいけないと。嫌ならやめればいいのだけど、やめられないなら、そこで、楽しみを見付けなくてはいけない。

幸い、言葉には興味がある。最初の十秒間の挨拶（あいさつ）を台本どおりではなく、毎日違う挨拶をするように心掛けました。十秒間徹底的に楽しんでやろうと決めたんです。

例えば、「春が近いですね。」というよりは、「太陽に近い梅からほころんできました。」と言う。

聞いた人は「なるほど。」と思う。「春が近いですね。」と言われても、当たり前です。自分が見たことや聞いたことを自分の感覚で言わないと、共感してくれない。「春が近い」と言わずにそれを感じさせる表現を探すことです。そのために言葉を選ぶこと。

下重さんの試みは、大当たりだった。半年経ち、一年経つうち、周りのスタッフの反応もまるで異なるものになる。視聴者からも「楽しみにしています。」という手紙が届くようになる。

言葉は人と人との心や感情をつなぐものなのだ。しかし、毎日自分の感情にぴったりくる言葉を探すには、それだけの語彙力がないと駄目だろう。どうすれば、語彙力が増えるのだろうか。

自分がきちんと表現しなければ、相手に伝わらない

語彙力は知識ではありません。知識なら辞書や百科事典を見ればいい。それでは人を感動させない。

今、自分が伝えたいこと、感じていることにぴったりした言葉をいかに探し出すことができるかが大切ですね。自分が見たり聞いたり、思ったりしたことをいかに言葉にできるかということでしょうね。

自分が感じている言葉を探し出す訓練は誰にでもできますよ。

訓練というと難しいし、しんどく聞こえますが、簡単です。例えば、「うれしい」や

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com